

ホトトギス

二月号



ホトトギス
二月号
昭和二十二年
三月廿一日発行
東京
三友社

俳句随想〔四百十六〕

汀子

「ホトトギス」では、俳句を作る時の心得ごととして季題を大切にしている。そして、「ホトトギス」で勉強する方々はそれを踏襲して俳句には季題が大切であると思つて季題をしつかり使つて勉強しておられる。いま、ホトトギス以外の人達は「季題」を「季語」と言っている。学校で「俳句」が出てくる国語の授業でも「季語」と教えているようだ。正岡子規、虚子の時代には誰もが、「季題」と言い、「季語」とは言わなかったのである。では、何故「季題」を「季語」と言うようになったのか。聞く所によると、「季語」と言い始めたのは「大須賀乙字」だと聞いている。彼は新傾向俳句を提唱し、アンチ虚子を貫き、文部省に「季題」を「季語」というように提唱したと聞かされていた。

真偽の程を確かめたわけではないが、「ホトトギス」では「季題」と「季語」をはつきり分けて認識して行きたい。季題は季節の言葉であると同時に、古来より詩や俳句に読まれて来た意味のある季節の言葉であると認識したい。難しいことをいうのではないが、「ホトトギス」は歴史がある。ここは譲れないという俳句を知つて踏襲して行きたいものである。現代俳句は無季容認でもある。それらのことを深く考えていないかもしれないが、私が虚子や年尾の許で学んできたことは、正しく次の世代に伝え残して行くのが、私に遺された大切なこととして、「ホトトギス」の方々に伝えると思う。

句日記 汀子

平成二十八年二月一日 ロイヤル俳壇

早春や恙の話消えしより

薄氷や庭へいざなふ心あり

春の風邪欠席多き春となる

その後の話となりぬ春の風邪

旅終へてより早春の一頁

二月六日 荻屋ホトギス会

春寒きこと癒えし身をいとはれよ

春暁の空の下弦の月残る

二月七日 下萌句会

東京の春なほ浅きてふ知らせ

下萌に足のやさしさついて来る

春時雨とはもう言へぬ本降りに

春浅きことを忘れてゐる外出

二月九日 大阪倶楽部

寒明けし心の枷をほどかんと

猫柳川辺に降りて来し二人

鶯の消息如何に吉野山

止みさうに止みさうに春時雨かな

春時雨予報は聞いて出掛け来し

又一人春の風邪てふ消息に

二月九日 綿業倶楽部

地に下ろしたる盆梅の咲き継げる

春寒の外出に心添ひゆける

濃紅梅庭の暦日従へる

ほつほつと梅に主役をゆづりたる

二月十一日 清交社

春寒の庭一巡りして来しと

日々褪せてゆく山燒の名残とも

金縷梅の花と気づきてよりのこと

地に下ろす盆梅育ちゆく辺り

快晴が春寒ほどきゆきにけり

春寒の表情消えてより会に

二月十二日 工業倶楽部

春の風邪尾を引くままに癒えしこと

寒明けしことに心のほどけゆく

薄氷の朝の時間の経ち易く

何となく抜けきらぬとは春の風邪

寒明や通ひ馴れたる空の旅

二月十六日 有恒俳句会

立春は心のよるべ明るけれ

紅梅の咲き濃紅梅咲き終る

春寒き朝と気づきしよりのこと

BもA B型も春の風邪

欠席と告げ春の風邪とは云はず

祝賀会済み春寒き朝となる

春時雨零せし雲の消えてをり

二月十六日 無名会

春浅くとも一泊の旅靴

薄氷にはじまる朝の庭となる

原稿に向かへば春の浅くとも

消えてゆく薄氷に朝はじまりぬ

川風を抜けてゆくととき春浅し

昨日会ひ今日春浅き日と思ふ

東京へ日帰りの旅春浅し

二月十七日 夏潮句会

いつ雨の止みし忽ち冴返る

紅梅の盛りの移りゆきにけり

冴返るとも日の差してゐる間

しんがりの一人が揃ひあたたかし

全快ともういへさうに春めきて

猫好きの話が春を運び来し

家出せし話は春の猫のこと

二月二十一日 虚子生誕祭

濃紅梅よりははじまりし梅暦

梅二月生誕祝ひ集ふ会

二月二十二日「あらうみ」九百祝句

あらうみの祝ぎの船出のあたたかし

あらうみの祝ぎの船出のあたたかし

二月二十二日 祝「紫苑」

華やぎを花に托せし誌齡祝ぐ

咲きつづく紫苑の月日ゆるぎなく

二月二十五日 きさらぎ

もう仁木弾正は居ず二の替

風吹けば春あともどりして旅に

遭難を怖るる雪崩なりしかと

ただ聞くも人事ならず雪崩かな

口遊む台詞すらすら二の替

二月二十五日 アネモネ句会

みよし野の春告鳥を待つことも

一句会済み癒えてゐし春の風邪

小さなき雛飾れば人を待つ心

八人の息にアネモネ咲きゆきぬ

二月二十六日 時雨句会

野焼跡とはあきらかに風匂ふ

春浅きことは承知の旅支度

旅つづき一喜一憂春浅し

早々と花の案内すること

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年二月一日 梅花祭選者吟

梅が香と思ひ出包む掌

二月二日 カトリック新聞選者吟

初鶏に天国の門開かるる

二月三日 「あらうみ」 九百号祝句

荒海を来て薫風に包まるる

二月四日 蕉心会

寒明の日差と雲の鬩ぎ合ひ

開き初むものにしよしゆんの香りかな

春光を弾き釣竿撓みけり

今日よりは春の雲てふ高さ持ち

釣糸を噛みつつ水の温み初む

若いつていいね春立つ二人連

青空と白梅紛れざる高さ

春立つといふに清原お前もか

二月六日 芦屋ホトトギス会

春寒や富嶽全容顕にす

一滴の雪解水より大河生れ

芝焼いて八十路の芦屋マダムかな

二月七日 野分会芦屋例会

君となら濡れて行けさう春時雨

番傘の音からからと春時雨

二月七日 青嵐会菅屋例会

薄水を踏んで昔の甦る

芝を焼き庭に手摺の増える家

薄水に閉ぢ込められし泡一つ

野火走る先に火の山噴いてをり

二月八日 朝日カルチャー若草句会

副都心旧正月の歩幅もて

公返の一閃に湖固まれる

冴返る都庁展望階の視野

穴釣といふ公魚の明と暗

路の臺蝦夷の大地の目覚かな

二月九日 むさし野吟行会

路の臺地上の恋を覗くかに

虚子像も二月礼者の目差に

春浅し除幕せし日を引き寄せて

梅が香も捉へシャッター切られたる

人梅に酔ひ梅を撮り梅を詠む

二月十一日 土筆会

一片の散りてより梅香を放つ

その中の紅梅に白従へり

紅梅や江戸の血潮を漲らせ

肅々と建国記念日の句座へ

二月十三日 「河内野」新年会

緑とは二月礼者の華やぎに

二月十六日 北國文芸選者吟

君生る獺魚を祭る頃

二月十八日 登高会

騒がしき建国記念日の都心

若布刈舟鳴門の渦に採まれつつ

白銀を吸ひ尽したる春田かな

関ヶ原古を知る春田かな

二月二十三日 若水句会

君子蘭咲けば太陽近くなる

虚子の歳超えて余寒を遠ざけて

春時雨猫の額を濡らすほど

君子蘭虚子生誕の日の狭庭

俳句祭受賞の君に余寒無く

春時雨琵琶湖疎水を誇る古都

春時雨湖北の哀史語り初む

二月二十四日 目黒学園句会

磯竈真珠筏を指呼にして

片栗の花紫に暮れゆける

ほんたうは星に恋する猫であり

うちの恋猫はロミオになり切つて

二月二十八日 青嵐会東京例会

片栗の花シリウスの一ト雫

梅日和マラソン日和てふ都心

花壇とは別の華やぎいぬふぐり

恋猫に芝公園の明け初むる

梅見客めきたる猫の視線かな

二月二十八日 野分会東京例会

冴返る風が一片弄ぶ

対岸に日差鏝め春時雨

マラソンの果てし路面の冴返る

年上は興味おまへん春時雨

佐保姫の恋路の闇や春時雨

雑詠 廣太郎 選

蛇草を動かなければつまらなく
 人のことばかりを噂して夜なべ
 睡蓮の大日向とはなりにけり
 詩心の脹らむまでのサングラス
 両足に鉛の重さある炎暑
 指差せば指に乗りたる遠花火
 海底に沈む都の上の月に月
 秋哀し遊女となりし女官達
 壇ノ浦悲劇ありたる水の澄む
 どことなくいびつ今宵は小望月
 降りさうな空を重ねて夜々の月
 邯鄲や庭を遥かなものにして
 風寄つて来るのは胸の赤い羽根
 秋声の硯の海の底に湧く
 紡ぐ音も縊り合はす音も虫の秋
 裏白の乾ききつたる音はづす
 新しき駅舎突つきる一月尽
 水音はひかりのかたち春隣

福山 竹下陶子

同

同

渋川 木暮陶旬郎

同

同

神戸 和田華凜

同

同

龍ヶ崎 今橋眞理子

同

同

神戸 立村霜衣

同

同

東京 今井肖子

同

同

秋の声潜む鍵付日記帳
 透きとほる風の届けし秋の声
 やさしさをふはりと胸に赤い羽根
 孫達の草矢の的になつてやる
 梅干してさつさと映画見に行きし
 恐竜の骨仰ぎぬる夏帽子
 秋風や見送り坂を見送られ
 明日さらに高み訪ねむ山の秋
 秋深き地獄極楽弥陀ヶ原
 手作りの魅力に目覚め夏休
 割箸も添へカトラリー卓涼し
 三分の二ほど開いて秋扇
 歪とは内なる力榎檀の実
 秋郊やどんだん先へ行く二人
 秋の海広がる磴を登りきる
 鴉たたかふ炎天の声あげて
 露けしや瓦礫より犬現はるる
 倒壊の寸前にして冷まじや
 紅白の牡丹に獅子や能始
 鬼車鳥は唐土の鳥や薺打ち
 母生きてゐし頃はせし粥柱
 うつむけば昔女や風の盆
 団栗の中の大地の未来かな
 やはらかな土少し抱く貝割菜

神戸 涌羅由美

同

同

徳島 岩田公次

同

同

長岡 安原 葉

同

同

神戸 千原叡子

同

同

香川 湯川 雅

同

同

熊本 岩岡中正

同

同

神戸 後藤比奈夫

同

同

山田佳乃

同

同

雑詠句評（二月号より）

美奇・静龍・肖子

葉・中 正・とほ歩

眞理子・むつみ・保佳

憲明・廣太郎

酒の香のせしといふ滝まのあたり

神戸 後藤比奈夫

酒の香のせしとは岐阜の養老川上流にある養老の滝であろうか。高さ三十米、幅七米、孝子伝説がある。

元正天皇（第44代）が行幸をされ「美泉を以て老を養ふべし」として命名、年号「養老」と改められた名瀑である。

「まのあたり」の下五が心の動きを見事に伝えておられる。

（美奇）

岐阜県にある養老の滝の伝説は有名であるが、その滝を御覧に

なったのだろう。滝といえば作者の御尊父様の句も有名である。その句も、この滝を御覧になって、ふと意識されたのかも知れない。先頃御息を亡くされるという大変な御不幸を体験されているが、俳句の力を感じる。（廣太郎）

恋をしてゐるとは見えぬ泳ぎの娘

福山 竹下陶子

水泳のシーズンにはかなりの記録を打ち立て日本中を湧かせた女子選手が、一つの大会を区切りに突如選手生活を引退すると発表して、さっさと婚約をされると、応援者としてはなんだか期待をはぐらかされた気持になる。

現役で活躍している時には、恋をしているかどうかは身内の方でも分からないことなのであろう。意外性のある句材である。

（静龍）

オリンピックを目指し、必死で水泳の練習をしている女性が想像出来る。一生懸命スポーツに打ち込む姿は、男にも勝る迫力が感じられたのだろう。しかし水泳を離れると、勿論一人の若い乙女としての生活を送っているのである。素敵な恋人が居るのだろう。若々しい発想の句である。（廣太郎）〈以下略〉

天地有情

心子選

今日来よと今来よといふ牡丹かな 神戸 三村純也
 紅白をいづれも極め初牡丹 同
 江戸と蝦夷繋ぐ卯月の空の道 東京 稲畑廣太郎
 代掻いて蝦夷の大地を覚ましゆく 同
 殊更に今年寂しき月見かな 神戸 和田華凜
 秋風に背中押されて女坂 同
 老の喉けさは滑らか初諷経 同 後藤比奈夫
 寒卵上寿に未来なしとせず 同
 湯上りの夜半また庭へ今日の月 長岡 安原 葉
 一睡りせし子も揃ひ夜食かな 同
 繕うて虚子の書大事虫干す 相模原 木村享史
 清貧の蔵書は豊か虫干す 同
 一人居をつつむ雨音それも秋 東京 今井千鶴子
 霧深く着きしホテルの長き廊 同
 余震なほ実石榴はいよいよ赤く 熊本 岩岡中正
 職人はひたすら無口台風来 同
 明月や雲白々と走りをり 東京 河野美奇
 ふと覚めて諦めをりし望の月 同

霧かかりくると見る間につつまるる 龍ヶ崎 今橋真理子
 霧恐れ霧樂しみて山荘に 同
 夕風となりてやうやく爽やかに 東京 山田閨子
 東京タワー臨む病室鳥渡る 同
 正面に富士初乗のハイウェイ 同 今井肖子
 一回り大きくしたる初暦 同
 終戦日かの放送の耳朶にあり 吹田 大橋 暁
 百日白庭に白雲湧くごとし 同
 道を消し奈落を隠し霧の這ふ 神戸 池田雅かず
 霧を抜けてもまた次の霧の中 同
 わが生の終りは知れぬ時雨かな 福山 竹下陶子
 煩惱の欲捨てきれずしぐれけり 同
 葛咲くや遠山なみのあなたまで 群馬 中杉隆世
 一本の芒となりて暮れにけり 同
 円虹を見にコックまで外に出で来 神戸 千原叡子
 返信を書くきつかけの夜の秋 同
 歩す吾に今日は目立ちて赤のまま 熱海 嶋田 一步
 白牡丹空はゆつくり暮れてゆく 同

若 者 稲畑汀子

「汀子先生ですか？進藤剛至です」受話器を取ると、特長のある進藤君の声飛び込んで来た。「ええ、そうよ。今どこから？」「東京からですが、今度九月九日から一週間ほど関西に帰るのでお訪ねしてもいいですか」「うーん、ちょっとまって、私が在宅の時間を調べてみるから」「はい、よろしくお願いいたします」

伝統俳句協会の全国俳句大会ほか予定がぎっしり詰まっている時期で、十二日の午後だけ在宅することになっていた。

「それでは十二日の午後にお伺いします」「十四日に甲南高校に私の句碑を建てて頂くことになっているけれど、それに来られたら如何ですか？」「それは、時間がとれるかどうか……、ともかくお伺いいたします」と電話は切れた。

進藤君は甲南高校から慶応大学へ進んだ。卒業すると一流会社へ就職し順風満帆の人生を送り始めていた。俳句甲子園で表彰されたと聞いたが、その時の選考委員の中に稲畑廣太郎が居たと聞

いた。そして甲南高校のグループが優勝したことも知った。

「汀子先生ですか。今からお伺いして宜しいでしょうか？」

「はい、どうぞ、もう関西に来られているの」

「はい、いま芦屋川沿いを歩いています」

「じゃあ、どうぞ」

間もなく門のベルが鳴った。

「進藤君ね。入って下さい」

「はい、ありがとうございます」

大きな紙袋を下げて入って来た。食堂にしている居間に座って貰った。割にとつとつと喋るので、私が一人で喋っているようになる。

「何か、話したいことがあるのでしょうか？何でもお話ししてくださいよ」

「はい、僕もともと甲南の図書室で先生の俳句入門の本を読んで、俳句を作りたくなっただけです」

「あらそうなの、今では伝統俳句協会賞の新人賞も取ってすごいじゃないの」

「でも、その後、総合俳誌から頼まれて俳句が載ると、その内容について色々言われました」

進藤君の目に涙が溢れてきた。純粋な若者に何と言おうか、私はじつと彼の様子を見ていた。

「剛至君。あなたまた俳句人生の第一歩なのだから、なにも恐わるものはないわよ。好きに俳句を作って、しっかり自然を見て、感じたものを素直に俳句に作っていったらいいのよ。言いたい人には言わせておけばいいのだから」

大学を卒業して就職したばかりの時、ホトトギス吟行会に現れた進藤君は頬がこけて、見違えるほど痩せていてびっくりした。会社の寮には食堂もなく、余り食事がとれていないのではないかと尋ねてみた。

「さあ、私はこの会の後、芝公園に帰るから、一緒に車に乗って帰ったらどう？」

「はい、ありがとうございます」

「メルパルクと一緒に晩御飯を食べましょう」

彼は私が注文したのと同じものを気持ち良く平らげた。

「ともかく、痩せないでしっかり食べなければ駄目ですよ。若者がお腹を空かせるなんて。我々は戦争中お腹を空かせたけれど、今は飽食の時代ですよ。若者が痩せていると心配ですよ」

「はい」

「さあ、早く帰りなさい。ここから一人で帰られますね」

「はい」

目の前に座っている進藤君は、もうあの時のように痩せてはい

ないのが頼もしかった。

「句碑のお祝いのお花束を持って来ました」

大きな袋から見事な花束を取り出して私に渡すと、ほっとしたように笑って帰る挨拶をした。

